

# THE CITY OF YOKOHAMA

歴史を生かしたまちづくり

第7号

## 横濱新聞

平成3年(1991)11月16日発行

企画編集・発行／横浜市・横浜市歴史的資産調査会  
事務局／横浜市都市計画局都市デザイン室内  
〒231 横浜市中区港町1-1  
TEL.045-671-2023 FAX.045-683-3415



撮影：米山淳一

## 甦った馬場の赤門

稲葉和也

(東海大学助教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

鶴見区馬場の澤野家長屋門は、通称「馬場の赤門」と呼ばれて親しまれてきました。この赤門は安政の大地震があった安政2年(1855)、当家が馬場村だけではなく、東寺尾、北寺尾、西寺尾の4ヶ村の名主を兼務する総代名主となり、名字帯刀を許されるようになってから建てられたものです。長屋門は本来武家の表門として建てられたのですが、士分として扱われるようになった村の名主も特別に建てることか許されました。

名主の長屋門は中央の通路を挟んで、その両側に教倉と納屋にありますが、そのどちらかに武家の長屋門に付ける見張りのための出格子窓を形式的に付ける場合もあります。しかも、当家の長屋門には、その通路部分に紅殻(べまこから)で朱が塗られており、そのため赤門と呼ばれていたのです。赤門は、例えば東京大学の旧加賀藩前田家の赤門がそうであるように、武士階層では、自分より格式の高い家から嫁を迎える時には、朱色の門を建てる

風習がありました。当家の場合も、いつの時かめでたい婚礼に際して朱が塗られたものと思われま。

澤野家は火災で主屋を焼失して、古い文書を失い、当時のことが明らかではありません。馬場あたりは丘陵地で、入り込んだ谷戸に水田をつくっておりまして。澤野家の屋敷は、その谷戸の入り口にあっていたので、水田越しに見える赤門はとも目立ったことでしょう。今ではその周辺にも家が建ち並んで昔の面影はありませんが、この赤門だけが当時を偲ばせてくれます。

今年になって、歴史を愛されていたお父様を亡くされた澤野久幸さんは、横浜市の「歴史を生かしたまちづくり要綱」に賛同されて、この門を保存、修理して、地域の文化活動に寄与してもらえればと申し出られました。この要綱は外観の保存を旨としておりますが、内部の利用も考慮して、当初の形に復元することとなりました。明治以降に付け加えられた窓を撤去したり、居室となっていた納屋を改めたり、瓦葺きだった屋根は創建時の茅葺きの雰囲気を出すため銅板で葺き替えました。復元された長屋門は、今後地域の方々の協力で郷土資料を集め、民具や古文書などが展示されることになっております。昔権力のシンボルとして建てられたこの門は、「まち」の文化遺産として甦ったわけです。



澤野家長屋門(昭和4年頃) 資料提供：鶴見歴史の会 大橋可氏

### 澤野家長屋門

(横浜市認定歴史的建造物)

通称：馬場の赤門

所在地：横浜市中区鶴見区馬場2丁目

建築年代：江戸時代末期 安政年間

構造：木造平家建 入母屋造

規模：桁行 8.5間 梁間 3間 面積 84.46㎡(25.5坪)

外壁仕上：腰下見板張 小壁土壁漆喰仕上

# 澤野家長屋門「馬場の赤門」 修復工事完成

## 第10代当主久幸氏、父を語る



長屋門修復工事竣工式の記念写真(前列中央が久幸氏)

通称、「馬場の赤門」として、近在の人々に親しまれている鶴見区馬場2丁目の澤野家長屋門の修復工事が完成した。

工事の完成を楽しみにしていた先代当主豊氏は、竣工を待たず去る4月22日に他界された。後継者の久幸氏は父豊氏の遺志を継ぎ、この修復工事に熱心に取り組み、完成にこぎつけた。

久幸氏は、現在コンピュータソフトウェアの会社を営む実業家であり、その仕事柄、常に時代の最先端を走っている。

コンピュータソフトウェアと歴史的なものとは、特に直接的に共通するものはないと思うが、と前置きしながら、久幸氏は「歴史を知ることが、将来への洞察力を養うことになり、会社経営をはじめ、人生を充実させていくための基本的なこと」と、歴史的な物事には本質的に現代生活にも役立つことが多いと考えている。「歴史的建造物などに掛け替えのないものを保存していくことは、現代のように経済的価値観重視の風潮から、より心の豊かな社会へとシフトしていくのに重要なことと思う」と久幸氏は語る。より豊かな価値観をもって物事を見るという姿勢は、長屋門の保存に熱心だった父の影響が大きいのであろう。

竣工になった長屋門を前にして久幸氏は、父豊氏の熱意に思いをはせながら、「一目だけでも生まれ変わったこの門を父に見せてやりたかった。」と述懐していた。

澤野豊氏は、明治33年2月生まれ、澤野家第9代の当主であった。

「良くも悪くも放任主義だった。私が子供のころ、学校の勉強しろというようなことは、一度も言われたことがない。」久幸氏は父の思い出を語ってくれた。「しかし、見知らぬ土地に行くことが好きで、湘南地区をはじめ、いろいろな所に連れて行ってくれた。」と続く。子供の教育の場は学校ばかりではないということ、父は実践で示した。「庭に子供が入ってくると、「うるさいやつらだ」と言いつつも怒るくせに、子供の教育に役立てば、ということに結構いろいろな学校に寄付をして喜んでた。」という。この父にして、現在の久幸氏があるのだろう。

豊氏は、生来の趣味人であった。文を綴るのを非常に好み、「おばあさん物語」(前後編)や随想を多数残している。彼の綴る文章には独特なリズムがあり、ものを見る視点にも非凡な感性を垣間見ることができるところから、やはり久幸氏が語るとおり独自の世界を築きあげていたのだろう。

父の思い出はつきないという久幸氏は、澤野豊とその妻スズの三男として生まれた。豊氏とスズさんは、なかなかの夫婦であったようだ。その様子は「おばあさん物語」の中でも綴られている。

ある日、豊氏はスズさんの指輪を買入れしてしまい、何度か書き換えたものとうとう流してしまっただけで、スズさんは大逆無道、ありったけの罵詈雑言を豊氏に浴びせた。豊氏は「暴風圏を脱する迄は黙って座して、静かに時の流れを待つ、滔々として流れていく、まことに雄辯である。せめて選挙の時位の位話せたら人を感銘させることが出来るだろうと、思いつく。」それを聞き流した。

しかし、言われる事はもっともと思いつき、豊氏はダイヤの指輪を買ってやることをスズさんに約束した。



修復工事前の長屋門

質屋で流してから20年、そして、その約束からも数年が経った。その間、豊氏は何度かデパートをのぞいているが、ある探偵小説を思い出してこの件に結論を出した。大粒のダイヤの指輪をしたこの婦人が妻であるという内容から、「私は、妻の安全保障を願うが為に、こんな大きいのは、買ってやらないことにした。」

久幸氏は1990年7月に父の作品を「世紀の流れ雲」という一冊の本にまとめて発行したが、長屋門の竣工式に列席した人々に改めて父の思い出としてこの本を紹介している。

「『世紀の流れ雲』は、ライフワークとまでは申しませんが、物を書くことが好きだった父が、本にしました「おばあさん物語・前後編」と、亡くなる直前数年間に綴り続けた随想「世紀の流れ雲」を集約したものです。

特に随想「世紀の流れ雲」は、体力も目も衰えるなかで、おおげさに言えば「血の出るような」努力で書き上げたものです。

父にとって書くことが「生きる」ことへの大きな心の支えになっていたように思えます。従って、父のささやかな生前の証としてご一読していただければ幸いです。」(抜粋)

久幸氏は今この長屋門の一般公開を考えている。郷土資料や歴史的資料の展示もできれば、と地元の方々との話し合いも既に始まっている。「馬場の赤門」は、澤野家の心の支えとして、そして地域の記憶の語り部(かたまり)として、その役割はますます重要なものとなるだろう。

## ホテルニューグランドの家具たち

ホテルニューグランド旧館は現在改修工事のため休業中だが、この期間を利用して由緒ある家具の調査が実施された。その中間報告を見てみよう。

ホテルニューグランドの家具は、昭和2年のホテル創業時に元町の三光家具によって製作されたものである。横浜開港以来、元町付近で培われていた洋家具づくりの技術が生かされており、震災と戦災によって大部分を消失した元町の洋家具にとって、これらの家具は大変貴重な存在である。

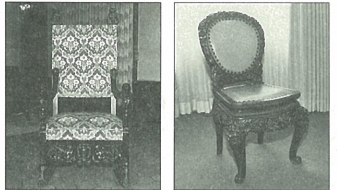
元町で家具が製作される場合、受注と企画・デザインを担当する家具屋と、系列化された各種の専門職の製作加工技術者の協力によって製品化されるものである。しかも、発注者である顧客と受注者である家具屋の充分な意志の疎通と、その意図を理解したうえで技術をもって応える職方等、関係者全ての息が合って初めて良い家具が生まれるのである。

このホテルの家具は、そうして生まれた家具の典型である。非常に消耗の激しいホテルの家具として使用されながら長期間にわたって現役の家具として活躍していることは、我が国においては非常に珍しいことである。これは、従業員に正しい家具の扱い方を教育していることや維持管理のための補修等を製作者に依頼していたことなど、ホテル側の家具に対する考え方が正しいことの証しと言える。

家具は、一部のものを除いてナラ材が使用されており、塗装はオイルステインの粉目止シエラックニス仕上げが主流である。この仕上げは、耐久性、耐熱性、耐アルコール性等に弱点はあるが、木材への浸透性に優れ、皮膜の落ちがないうえに、木目の美しさを生かすことができる。

デザインはクラシックの部類で、ナラ材とよく調和している。設計者達は、Jacobean様式を意識し、これが主流となっているが、Louis様式、Baroque風等各種のスタイルも混在している。

椅子張りに関しては、残念ながら初期の面影は



キングチェア 横浜彫刻の椅子 長椅子

調査協力：横浜家具を通して文化を考える会/株式会社 ホテルニューグランド

## 港北区日吉本町に洋館発見!

「やせがまん」がこの建物を保存している「中沢邸」

東横線「日吉駅」から歩いて8〜7分、駅前の商店街をはすれた所に日吉本町公舎がある。「これも日吉の街の歴史を語っている歴史的建造物ではないですか。」と中沢氏が紹介してくれた。自らも、昭和8年に建てられた洋館に生活している。「こうした建物に生活するのは、今では確かに贅沢かもしれませんが。」と中沢氏は語る。周囲からはマンションを建てるなどもっと効率的な土地の使い方をしたらどうだ、という話をよくされるらしい。しかし、「私の贅沢はこれだけなんです。何と言われても洋館を維持管理していくのは、非常に大変なんです。」と熱く語ってくれた。

先代が船乗りということで、室内は作り付けの家具など船のキャビンのイメージが随所に取り入れられており、廊下などの和風意匠とあいまって独特の雰囲気を感じさせている。家具も特注でつくられ、60年を経た現在も現役で使用されている。中沢氏の思い入れの深さが感じられる。

「建物と庭木は一体のもので、どちらが欠けてもだめですね。近所の方からは、庭の樹木が借景となって楽しませてもらっている、と喜ばれています。」という話はこの建物が地域の財産となっていることを示している。

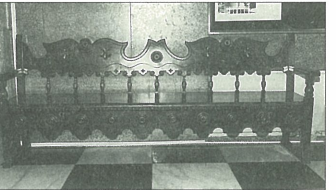
中沢氏はこうした歴史的建造物の保存には、地道な草の根運動が必要であり、横浜市が「歴史を生かしたまちづくり要綱」等によって、さらに歴

史的建造物の保存・活用に努力してくれるなら、市民はそれに応えていくことが大切だ、と語ってくれた。「私は「やせがまん」でこの建物を維持している。」という言葉に、中沢氏の「生き方」を感じる事ができた。

これは、駐留軍による張り替えと、その後の張り替えによって布地、充填材料、技術が変わってしまったためである。太平洋戦争までの元町には多数の洋家具屋があったが、その中でも三光家具は本格的なデザイナーを擁する異質な存在であった。しかし、異質ではあってもそれを支えたのは開港以来の歴史をもった元町の洋家具づくりの技術とその背景にある文化であった。

日本の洋家具発祥の地と言われる横浜元町でつくられた家具は、東京と横浜に多数あったが、震災と戦災によって大部分が失われた。その中で、横浜のホテルの調度として長年の使用に耐え、今もその役割を果たしているこれらの家具は非常に貴重なものである。

世界の各地に家具工芸品類を収集した博物館は多数ある。そして、その国の文化に対する姿勢が、その内容と施設によってわかる。洋家具には縁の深い横浜であるが、残念ながら家具の資料館はない。しかし、このホテルの存在は、横浜の生きている家具の博物館といえる。



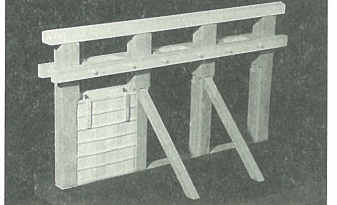
港北区日吉本町 中沢邸

日吉本町公舎

## 姫小島水門のしくみが解明される

金沢区の姫小島水門に関する調査結果が、このほどまとめられた。

天明5年頃(1785)から昭和39年まで、宮川の河口部に位置する姫小島には、夕除用水門が設置さ



姫小島水門の模型(復元)

れていた。これは、地元住民から「あおり水門」と呼ばれていたもので、江戸時代中期に、金沢入江内新田の塩害を防止するために建設されたものだ。そのしくみは、4本の石柱の間に上部を金具で固定された3枚の木製門扉があり、それが開閉するようになっている。引き潮時には、上流からの水流によって水門が自然に開き、川の水が外海に出ていくが、満潮時には海面上昇によって自動的に水門が開いて、内陸部への海水の流入を防止す

るもので、他にあまり例のない水門方式である。簡単な方式ではあるが、この独自の水門の機能は貴重な土木遺産といえる。

歴史的な沿革を追ってみると、この入江は源頼朝が海上交通の要所として利用し、その後景勝地として有名になるとともに塩田としても機能した。しかし、金沢と鎌倉を結ぶ交通路確保のために瀬戸橋を架設し、長い築堤を施したため、入江内の海水の流れが滞って、塩田業の生産性が低下していくことになった。

そこで、永島祐伯(号は泥亀)が、天明5年(1785)この入江の干潟に新田を開き、海水の流入を防ぐ必要が生じたことから、前述した水門の建設が行われた。その後、幾多の水害を受けたが、歴代の永島家によって管理されてきたものである。

姫小島は、照天姫伝説にみられるように、地域にとって神聖な場所として継承されてきた。伝説によって守られてきた背景には、この水門が地域の人生活によって大きな影響を与えていたからかがある。水門を大切に守っていくための生活の知恵と言えるところが感じられる。

姫小島水門は、走川プロムナード内のモニュメントとして、来春にはその姿を再現する予定となっている。

# 第19回 歴史的景観都市連絡協議会が 開催される

「歴史的景観を守ろう」を旗印に

地方自治体の景観担当部局の集まりである歴史的景観都市連絡協議会が、8月29・30日の2日間の日程で青森県弘前市にて開催された。回を重ねて19回を数えるこの協議会は、歴史的、伝統的な市街地景観を有する都市がその保全を図り、情報を交換することを目的に昭和48年に発足した。現在は40市町村が加盟している。

初日は、文化庁・長谷川主任文化財調査官が「伝統的建造物群保存地区の現状と課題」、建設省・船引都市計画課長補佐が「最近の都市景観施策について」と題して講演を行った。

ついで、千葉大の玉井助教授が「弘前の町並み」と題して記念講演を行った。同助教授は、「弘前には城下絵図が多く残っており、過去に遡って都市景観を復元できる。他の都市に見られない町割りをかえていることがわかる。」と分析し、さらに市内の民家26棟を調査した結果をもとに町並みの変化等を解説した。

この後、各市町村の事例発表を行って初日の幕を閉じた。

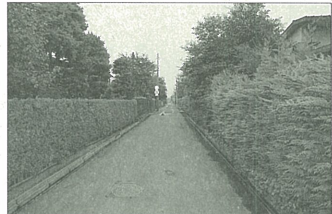
翌30日は、パネルディスカッションからスタート。テーマは「歴史的景観と観光」—歴史を生かした町づくりをするために—。弘前市、川越市、白川村、長崎市の4自治体をパネリストにし、京都市のコーディネーターで議論を進めた。

そして、国への要望事項等を採択して本協議会は閉幕した。

今回の協議会で特段に意識されたのは「都市景観」という言葉ではなからうか。20年になんなんとする本協議会の歴史の中でも、この言葉を認識させ啓蒙させてきた背景があるが、実態としては表面的なところのみで、まだまだという感があつた。しかし今回の協議会では各都市からこの言葉が聞かれ、しかもその取り組みも一層進みつつあることが鮮明になってきた。

実例として弘前市の取り組みの中からそのことを垣間みてみたい。

「弘前市における都市景観の取り組みも新しい段階を迎えようとしている。これまでの景観保全中心から、総合的な都市空間づくりへ、手探りでは



弘前市仲町(伝建地区)



弘前市・石塚家住宅(重文)

あるが歩み出そうとしている。」

「本市では初めて景観整備事業に取り組みはじめています。対象は都市計画道路の橋梁工事で、歴史的景観と調和しながら親柱や高欄、照明灯などについて、津軽の伝統工芸品の津軽塗をモチーフにデザインを施し、個性化を図ろうというものである。」

「これから展開しようとしている事業はおおむね弘前公園周辺の街路整備を中心としていくが、同時に沿道をどのように景観誘導、規制を図っていくかがポイントとなる。そのために今年度は、いわゆる景観ガイドラインとよばれるもので、岩木山の眺望の確保や弘前しさを焦点に将来の景観保全条例に耐えうるような指標を示せたいと思っている。」

というように、弘前市でも都市景観づくりの方向づけを終えられたところだといっているが、いずれの都市もこのような状況ではなからうか。その意味からいっても、今は景観を積極的に作り出す一つの転期でもあるのだろう。

(内山哲久：財団法人環境文化研究所・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

内らしさ”を生かした再開発を先導的に進めるといことも目的のひとつです。

こうした趣旨から、歴史的建造物の保全活用にも力を入れており、横浜銀行本店別館(旧第一銀行横浜支店)の建物も再開発地区内に移転させて保全活用を図るよう検討をしています。北地区の旧生糸検査所の復元とあわせて、開発と歴史的建造物の保全活用という二つの課題を同時に、しかも積極的に考えていこうという姿勢は、今後の再開発事業のモデルとなることでしょう。

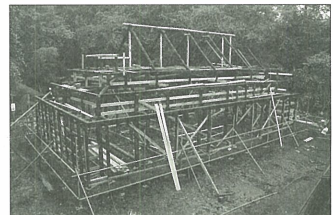
## 瀬谷区長屋門公園の古民家移築復元

横浜市瀬谷区阿久和町の長屋門公園内に、泉区和泉町から移築復元中の茅葺きの古民家「安西家」旧母屋の上棟が行われました。

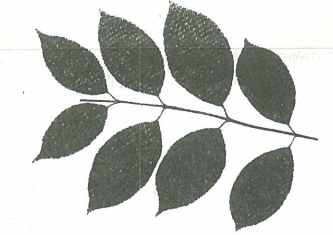
この公園は、横浜市政局が昭和63年から整備を進めており、平成3年度中にはこの古民家の復元工事が終了する見込みです。この公園用地にはもともと長屋門がありましたが、母屋が消失してしまっていました。そこで、現存する長屋門を生かして、古民家の形態を門と母屋のセットで復元するために、母屋を移築復元するものです。

古民家は同公園の歴史体験ゾーンに位置し、完成後は竹細工や昔の道具を用いた伝承的な遊びを体験できる場となる予定です。

緑政局では体験の場としての趣旨を工事中にも生かそうと、この古民家の土壁塗りの工程に市民の方々の参加を呼びかけました。11月の中旬には、足を泥だらけにしなが、今まで体験したことのない「土壁塗り」に喜々として挑んでいる子供たちの声が、この公園いっぱいに広がることでしょう。



移築復元工事中の古民家



## 生誕150周年記念 R.H.ブランドン 日本の灯台と横浜のまちづくりの父



来日時のR.H.ブランドン

安政5年(1858)の日米修好通商条約の締結をはじめとして、我が国は諸外国と矢張り早くに条約を締結し、国交を開いていきました。国交の樹立とともに、海外の新技术の導入を図り、いわゆる「お雇い外国人」が多数来日しました。

リチャード・ハンリー・ブランドンもその一人でした。当時はまだ不十分であった灯台の近代化を条約によって義務づけられた幕府は、イギリスに技術者の派遣を要請し、明治元年(1868)に来日したのが彼でした。

来日後、横浜の居留地を拠点に、日本の風土にあった灯台の建設に精力的に取り組み、明治9年

(1876)に離日するまでに30余の灯台を建設するという大きな業績を残しました。

その間、横浜、大阪、新潟など日本各地に彼の近代土木技術が移転され、河川・港湾・上下水道・電信・電話、そして教育と、多才な彼の能力は遺憾なく発揮されました。当然、本拠地である横浜では灯台の建設だけでなく、日本大通り、吉田橋、横浜公園等を設計するなど数々の業績をあげ、横浜の近代的都市づくりに貢献しました。

ところが、彼の生前はその業績にもかかわらず、一般にはあまり知られていません。それどころか、祖国イギリスにある彼の墓には墓標さえないといわれています。

1991年は彼の生誕150周年にあたるため、横浜でも多彩な催しが行われています。

## 横浜開港資料館 催し物のお知らせ

生誕150周年記念  
テーマ：R.H.ブランドン  
日本の灯台と横浜のまちづくりの父  
期 間：平成3年10月10日(木)～平成4年1月26日(日)  
開催時間：午前9時30分～午後5時00分(入館は午後4時30分まで)  
入館料：大人200円 小中学生100円  
休館日：月曜日・祝日の翌日、年末年始(12/28～1/4)  
11/4、11/24、12/23は開館  
問い合わせ先：横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3番地  
TEL.045-201-2100

## 第3回 横浜アーバンデザイン国際コンペ 募集のお知らせ

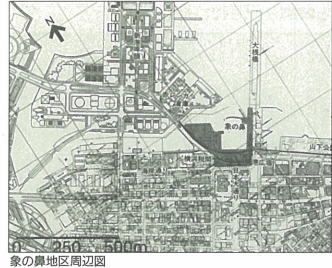
横浜アーバンデザイン国際コンペは、横浜の実際の都市空間を題材として、今後の都市のあり方を考え、都市デザインを提案するアイデアコンペです。

今回は横浜港発祥の地であり、みなとみらい21計画の一環として再開発が予定されている「象の鼻地区」が課題対象です。

都市と港の新しい関係を提案したアーバンデザインプランとそれを具体化した施設計画を募集しています。



象の鼻地区(手前の建物は横浜税関)



## テーマ：「都市と港の新しい関係」

横浜港発祥の地、象の鼻地区の街づくり

主催：横浜市/ヨコハマ都市デザインフォーラム実行委員会

後援：日本建築学会/日本都市計画学会/国際交流基金

応募方法：事前登録としてハガキに住所・氏名・電話番号・勤務先(学校名)を記入のうえ事務局へ送付すると事務局から登録票と資料が送付されます。

宛て先：株式会社ボイス・オブ・デザイン内 第3回横浜アーバンデザイン国際コンペ事務局 〒169 東京都新宿区西早稲田3-30-16 ホリゾン1ビル TEL. 03-5273-0149 FAX.03-5273-0374

締切：登録締切 1992年1月13日(月)当日消印有効

作品締切 1992年1月27日(月)当日消印有効

賞金：最優秀1点200万円、優秀2点各50万円、佳作10点各10万円

## 山手カトリック教会聖堂修復工事完了

横浜市認定歴史的建造物である「山手カトリック教会聖堂」の保全修復工事が、無事に完了しました。

この建物は、チェコ人の建築家J.J.スワガーの設計により、昭和8年(1933)に建造されたゴシック風の建物で、開国後の我が国初のキリスト教会であった横浜天主堂以来の歴史をもつ由緒ある同教会の3代目の建物です。横浜における外国人居留地の良好な住環境や文化摂取の様子を感じさせる外観をもっています。

保全修復工事の目的は、勿論建物自体の老朽箇所等の修理が直接の目的となっています。しかし、工事にかかわった人々は、そうした直接的な目的とは別に、何かの成果をつかんだに違いありません。

歴史的建造物の保全修復の作業とは、一つの建築物をただ修理するだけではなく、その環境や背景となる過去の記憶までも呼び起こし、そして、そこに新しい記憶を埋め込んで、未来に継承していく。このことに、より大きな意義があるということを感じた人は多かったのではないのでしょうか。

## 北仲通地区の再開発

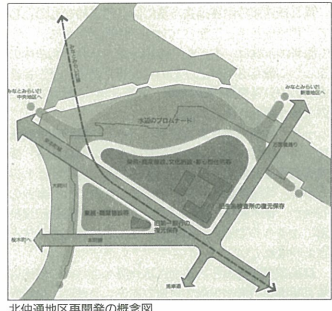
開発と歴史的建造物の保全活用

関内、馬車道を海の方に向かって進み、大岡川河口をはさんで、みなとみらい21地区をのぞく北仲通地区では、新しいまちづくりが始まろうとしています。

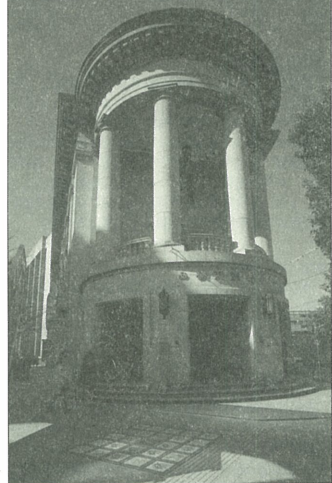
明治時代のこの地区は、鉄道の旧横浜駅に近く、諸外国の公館が集まったにぎやかな地区でした。その後も波止場が建設されるなどして発展し、現在もその豊富な歴史的資産によって往時の面影をとどめています。

北仲通地区の再開発は、旧生糸検査所の建物が含まれる北地区と横浜銀行本店別館が含まれる南地区とに大きく分けられますが、南地区の再開発事業が先行して行われています。

事業の正式名称は「北仲通南地区第二種市街地再開発事業」となっており、施行区域が約3haで住宅・都市整備公団が中心となって進めています。



北仲通地区再開発の概念図



横浜銀行本店別館

事業の目的は、みなとみらい21地区と関内周辺の既存都市部との連携を図るとともに、土地の高度利用によって業務・商業機能の集積を図ろうというものです。さらに、地域の特性を生かすという視点から、開港以来の横浜の歴史を踏まえ、「関

# 赤煉瓦倉庫

横浜港新港ふ頭煉瓦倉庫  
RED BRICK WAREHOUSES

◎明治・大正・昭和という激動の時代に横浜港の中心的役割をはたしてきた新港ふ頭は、第2次大戦後の港の近代化とともに、その座を本牧・大黒のふ頭に譲っていった。  
かつて横浜の人と物の流れの中心にあって、そこでのさまざまな人間模様を見守りながら、横浜港の発展を支えてきたこの建物も、今は扉を閉ざして、ひっそりとたたずんでいる。  
現役を引退してもなお、この建物がなぜか人を引き付ける不思議な魅力を備えているのは、横浜の都市の記憶を静かに、しかし雄弁に語り続けているからではないだろうか。

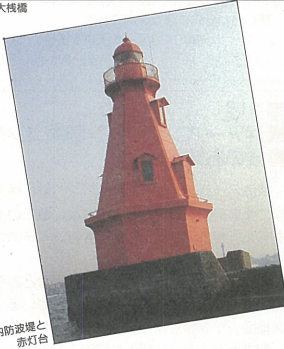
## 横浜港の歴史

赤煉瓦倉庫誕生までの経緯

安政6年(1859)の横浜開港当時の港湾施設は、東西2つの突堤からなる波止場のみであった。  
明治20年代に英国の工兵少将であったH.S.パーマーの設計監督のもとで行われた第1次築港工事によって東・北の両水堤と現在の大棧橋の前身である鉄棧橋が建設されたが、荷役は依然「はしけ」に頼る状態であった。



横浜港大棧橋

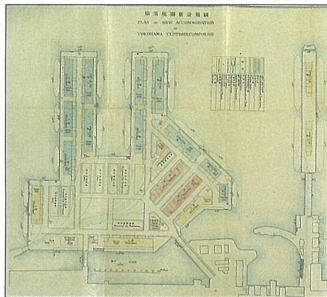


横浜港内防波堤と赤灯台

日清戦争後には、神戸・大阪両港の急進に危機感を抱いた横浜商業会議所が、港の拡張とふ頭の建設を政府に要望し、一時は実現に向かったが日露戦争の戦費負担のため工事は延期されてしまった。

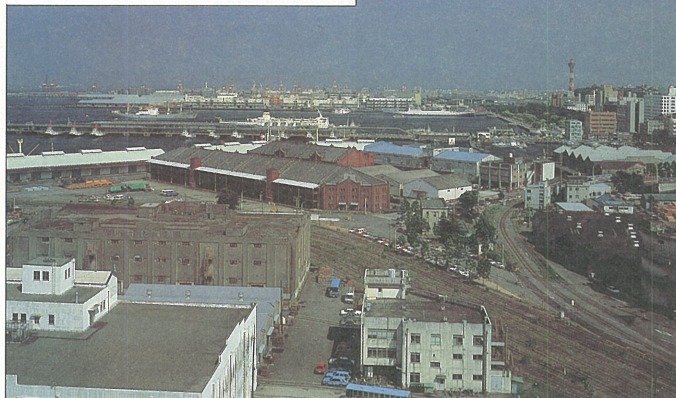
他港との競争が激化するなか、国費のみでの築港計画を改めた横浜市は工事費の3分の1を負担することとして、明治30年代末になってようやく第2次築港工事が開始された。

この工事の中核となるのが、新港ふ頭における日本初の突堤形式の繫船岸壁ふ頭の建設や鉄道の導入と赤煉瓦倉庫等の上屋の建設であった。「新港」という命名に当時の横浜市民の意気込みと願望が込められていた。



横浜税関新設備図

出典：横浜税関新設備報告(大正4年)

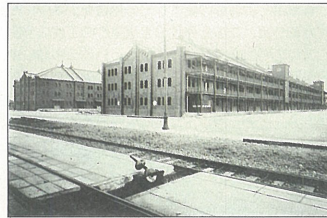


## 赤煉瓦倉庫のたどった運命

赤煉瓦倉庫の建築年代と規模

建築年代	1号 明治41年(1908)着工~大正2年(1913)竣工 2号 明治40年(1907)着工~明治44年(1911)竣工
規模(創建時)	煉瓦造3階建(一部4階)
間口	149.1m
奥行	22.6m
延床面積	約99,600㎡

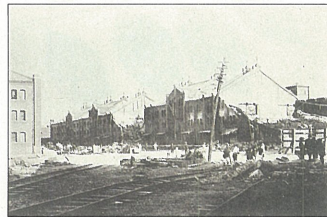
赤煉瓦倉庫は巨大な煉瓦造建築物であった。補強材として鉄材を使用し、現在のスプリンクラーに相当する非常用水道管、防火壁、出入口には二重の鋼製折戸又は引き戸を備え、耐震耐火については、当時最新の備えが施された。また、荷役用エレベーター(電力捲揚機による昇降機)も設置された官営の規範倉庫であった。



創建当時の赤煉瓦倉庫

大正12年9月1日、関東地方一円を襲った大地震により、横浜港の港湾施設のほとんどが壊滅し、機能は麻痺状態に陥る。完成後、わずか10年余りで震災に遭遇した赤煉瓦倉庫は、2号は倒壊を免れたものの、1号は半壊した。その後、1号はほぼ半分の規模に縮小され、内壁に鉄筋コンクリートの補強壁が付け加えられた。2号も耐震性改善のため、起重機の廃止、開口部の改変などの手直しが行われている。

こうして、関東大震災という未曾有の試練に耐えて、赤煉瓦倉庫は生き残ったのである。



震災直後の赤煉瓦倉庫(1号)

第2次世界大戦に入ると、外国との貿易は途絶え、赤煉瓦倉庫は軍需物資の補給基地としての役割を余儀なくされた。そして、終戦後は米軍に接収されてしまう。

米軍は赤煉瓦倉庫を営倉として使用したという。2号倉庫の内壁にペンキで描かれた富士山や帆船の絵が、そのよすがを留めている。本来の役割から離れた年月であった。



現在の新港ふ頭



2号倉庫全景



倉庫内部 壁面には富士山や帆船が……

昭和31年、接収解除。しかし、既に港には、船舶の大型化など、近代化の波が押し寄せていた。明治から横浜港の中心的役割を担ってきた新港ふ頭は、しだいに、その役割を本牧ふ頭などの近代的なふ頭に譲らざるを得なくなっていった。赤煉瓦倉庫も、今はその役割を終え、悠久の時の流れの中にたたずんでいる。

## 完成された煉瓦造建築 赤煉瓦倉庫の構造

### ◎煉瓦組構造

明治時代前期には、わが国で多くの煉瓦造の建物が建設された。現存するものは、度重なる地震の試練に耐え抜いてきている。煉瓦造建築の耐震補強について、本格的な取り組みの契機になったのは、明治24年の濃尾地震による煉瓦組構造建築物の大被害であった。煉瓦造建築の耐震補強方法には、代表的なものとして、鉄骨煉瓦造と錠鉄(ていれん)鉄構法がある。鉄骨煉瓦造は、あらかじめ組み立てた鉄骨構造体のまわりに煉瓦を積み上げていく工法である。辰野金吾設計の中央停車場(現東京駅 大正3年)において、この工法が採用されている。

一方、横浜赤煉瓦倉庫に用いられている錠鉄構法は、煉瓦壁体の中に、帯状の鉄を水平に積み込み、要所を鉄棒で垂直に固定し、耐震性の向上をはかるものである。錠鉄構法を用いた28例の建築のうち半数の13例が、妻木頼黄あるいは彼の率いた大蔵省臨時建築部によるものであり、錠鉄構法は時に妻木工法とさえ呼ばれている。

錠鉄構法にみられる煉瓦造建築への鉄材の使用は、煉瓦組構造の最終段階の技法である。わが国の建築が、鉄筋コンクリート造へ移行する過程の中で、錠鉄構法、防火床構造を用いた横浜の赤煉瓦倉庫は、建築技術上、完成された煉瓦造建築といえることができる。

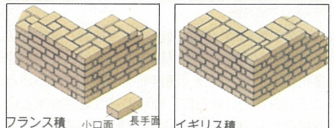
### ◎防火床構造

赤煉瓦2号倉庫は、鉄骨の柱に鉄骨梁を渡し、弧状の波形鉄板(生子鉄板)を架し、煉瓦層入りコンクリート、普通コンクリートを二重に打ち防火床構造としている。やや遅れて竣工した1号倉庫の2階、3階の床は、鉄筋コンクリート造で、床の大梁・小梁・鋼製の柱は、すべて鉄骨コンクリートで耐火被覆を施している。1号、2号倉庫の防火床構造の違いは、建築構造の技術の変遷を実例で示す貴重な遺構でもある。

### ◎オランダ積

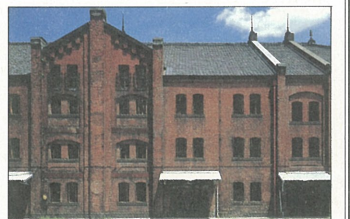
煉瓦は一つずつモルタルなどの目地材により接合して積み上げる。強度をあげるため、目地が垂直に通らないように破れ目地に積むことが原則となる。煉瓦の積み方は、一段に長手面と小口面が交互に並び「フランス積」と、長手面の段と小口面の段と交互に並び「イギリス積」が代表である。

赤煉瓦倉庫の煉瓦の積み方は、基本的には「イギリス積」の変形と見られる「オランダ積」であり、厚壁は外壁で長手面3枚(約70cm)、間仕切り壁で2枚半(約58cm)、見る者を圧倒する煉瓦造3階建の建築物である。



フランス積 小口面 長手面

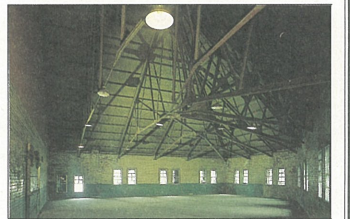
イギリス積



2号倉庫正面



2号倉庫内部煉瓦大壁



2号倉庫3階内部鉄骨トラス

## 明治建築界の巨人

大蔵省臨時建築部長

妻木頼黄(つまきよりなか) (1859~1916)



鎖国を破り新しく近代国家として歩み始めた明治政府の官僚建築家として、その建設を支えた最大の人物、それが大蔵省臨時建築部長を率い、赤煉瓦倉庫の建設で腕をふるった妻木頼黄であった。

大蔵省の宮内省の中心人物として、大蔵省の建物はもとより専売局・内閣・税関・監獄・主要港湾の設備まで一手に引受け、それらを確実に実現する能力は多くの人を感嘆させた。その一方で、日本勧業銀行本店(明治32年)や横浜正金銀行本店(明治37年 現神奈川県立博物館)など民間の建物の設計も手掛け、西歐古典主義は勿論、和風様式をも見事に手の内に収めた華麗な意匠を展開した。また、日本橋の高欄に見られる麒麟のデザインにも、そうした特色が溢れている。

安政6年に江戸幕府の旗本の長男として生まれ、幼くして父母を亡くし、7歳で相続した家督を失うといった出目が、そして工部大学校(東京帝大)中退、米國、ニューヨーク州コーネル大学留学という異端な経歴が、実務に長け和洋を縦横無尽にこなす妻木頼黄という建築家を生み出した背景にあった。(資料協力：横浜港港湾局)